

書評01

堀越 芳昭・日本協同組合連携機構 編

『新時代の協同組合職員―地位と役割』

全国共同出版株式会社 / 2018 年 6 月刊 / 269 ページ / 2300 円＋税
ISBN 978-4-793-41805-1

評者：山縣 宏寿

公立諏訪東京理科大学 共通・マネジメント教育センター専任講師



本書の課題は、協同組合職員の地位と役割、協同組合理念と日常業務の関係について検討を行うと共に、協同組合教育のあり方について提言を行うことにある。本書は以下に示す2部からなり、16本の論稿によって構成されている。

※

序章「協同組合職員の地位と役割」

堀越芳昭

第Ⅰ部「協同組合の職員を考える」

第1章「協同組合職員労働の可能性と課題」

田中夏子

第2章「協同組合における職員・労働者問題」

杉本貴志

第3章「協同組合理念に基づく『全員経営』の展開と課題」石田正昭

第4章「協同組合理念の実践と人材育成をめぐる問題状況」青柳斉

第5章「協同組合アイデンティティと職員の役割」中川雄一郎

第Ⅱ部 協同組合ではたらく

第6章「JA職員における『協同組合理念』の浸透状況と浸透促進策」西井賢悟

第7章「JAあつぎの組織・事業展開と人材育成」大貫盛雄

第8章「わがJAにおける協同組合らしい『人づくり』へのアプローチ」迫沼満寿

第9章「JA兵庫六甲の人材育成の取り組みについて」山脇利文

第10章「生協職員の意識実態と人材育成」

村田二三男

第11章「『65歳までの定年延長』と『同一労働同一賃金』への試み」島崎安史

第12章「ES満足度の高い組織づくり」

内麻良恵

第13章「組合員のつながりと共感を生み出す職員の意識と行動」毛利敬典

第14章「労働者協同組合（ワーカーズコープ）における組合員の意識の変化と社会的役割」田嶋康利

終章「協同組合の共同の意義と特質」

堀越芳昭

※

上記の通り、本書の特徴の一つは錚々たる論者を擁し執筆された点にある。書評を行う上で各論者の全ての論稿に言及するのが本来、筋であるが、紙幅の都合上、評者には困難である。以下では、非礼を承知ながら、本書におけるいくつかの論点を取り上げ、その特筆すべき点、また本書に残された憾み、彫琢の余地について私見を述べていくこととしたい。

第一に、本書の時宜に適った問題提起と本書を貫く、その卓越した意図である。評者が指摘するまでもなく、新自由主義的改革が猛威をふるい、労働・生活における質的劣化、その惨状は枚挙に暇がない。そのようななか協同組合の役割、その社会的な期待は不可避免的に高まっているが、今日、協同組合が直面する問題点として、例えば組合員の「顧客化」、協同組合職員

の「サラリーマン化」がしばしば議論の俎上にあげられる。それらの諸点も無論のこと、重要な論点ではある。しかしながら、本書の基本的なスタンスは、「最大の脅威」は協同組合運動の担い手の「心の中」にあるとし、1995年のICA 声「21世紀に向けての協同組合の宣言」を念頭におきながら「協同に対する自信の喪失」、協同組合運動の使命や目的、理念に対する「確信の欠如」をあらためて指摘を行うものである（9頁）。本書が企図する、その最大の目的は、協同組合職員の地位と役割を理論的、歴史的に、そして実践的に検討し、それらを明示することを通じて、協同に対する自信を取り戻すこと、そして何よりも協同組合の職員をエンカレッジし、理論的にもエンパワーする点にあると評者は理解した。時宜に合った試みであり、また慧眼と評してよいであろう。

第二に、研究史に対する明確な問題の問いかけである。本書は、様々な指摘が行われているが、そのなかでも「協同組合運動のそもそもの原点・目的が、自由競争経済下で苦しい環境に追い込まれた労働者の生活を協同の力によって防衛し、相互扶助の協同経済をつくりあげること」（50頁）であり、また「労働」に係る問題は、「協同組合にとっては副次的どころか中心的な課題だった」（47頁）との指摘は、特に優れて重要である。なぜなら「生協における消費者路線の勝利」のもと、協同組合の職員労働を組合員労働の単なる補完、サポートワークとの極めて狭い領域に追いやり、その地位、役割を限定的なものとする把握のもとでは、協同組合職員の地位や役割を正当に評価し、真正面から論じることはおおよそ不可能であるからである。本書は協同組合の職員労働について必ずしも十分な議論が蓄積されてこなかった研究史上の空隙を指摘すると共に、その蓄積の必要性を強調する性格も併せ持つものである。

第三に、本書はそのタイトル通り、羊頭狗肉ではなく、その地位と役割を文字通り描出する

ことに成功している点である。本書では各論者が、①「事業を通じた組合員ニーズ（暮らし・仕事の支援）の把握・充足」、②「自己組織化と民主的な運営への参画」、③「組織の『社会化』」、④「組織人としてのみならず市民として現代社会の積極的な構成者となる」を旨とする4つの機能（39頁）、「組合員と組合を、あるいは組合員同士を、さらにはコミュニティと協同組合員とを、結びつける『連結者』としての役割」（63頁）、さらには「職員の主たる役割は、協同組合を取り囲む広域の『公共空間』（『公共圏』）での行動・活動であり、またそこで生活し労働している個々の人たちを結びつける紐帯を強固にする諸条件を再生産すること」などの指摘が行われている。いずれも本書がその課題とする、協同組合職員の地位と役割を析出し描き出すものであり、新たな地平を切り開くものと評して差し支えないであろう。

最後に、書評の性格上、本書に残された憾みについて若干言及しておくこととしたい。本書の研究史上への大きな貢献の一つとして、「『協同組合理念』の浸透状況を感情・知識・行動の三次元で捉え」（160頁）、それらの関係を明らかにした点が挙げられる。そこで示された知見は、「感情レベルの浸透が進展していないと、行動レベルの浸透とより強い関係性を持つ知識レベルの浸透が進まない」等の諸点であり、本書のなかでも重要な骨格の一つをなしている。同論文（第6章）が本書に所収されている意義は非常に大きい。しかしながら、同分析において規模の大小、あるいは地域等の属性の相違に基づき差異が認められるのか、との評者の問題関心は、必ずしも満たされなかった。無論、「ないものねだり」の域をでるものではなく、このことが同論文の価値を損なうものではない。今後、さらに研究を発展させるなかで、それらの点についてもご教授頂けたら幸いである。

本書は、協同組合について論ずる者にとって必携の書である。ご一読を強くお勧めする。